

**P-293 緊急頸管縫縮術後の予後予測における
腔鏡負荷頸管長測定の有用性**

秋田赤十字病院, 秋田大*

真田広行, 平野秀人, 佐藤朗, 小川正樹*,
津田晃*, 田中俊誠*

〔目的〕頸管無力症に対する緊急頸管縫縮術後の予後予測における腔鏡負荷頸管長測定の有用性に関して検討することを目的とした。〔方法〕平成9年3月から平成10年9月までに、胎胞形成後に緊急頸管縫縮術を施行した頸管無力症11例を対象とした。経腔超音波断層法により、子宮頸管の閉鎖部分の距離を測定し頸管長とした。頸管縫縮術後7日以内に、まず初めに経腔プローブのみを腔内に挿入して頸管長を測定し、次に腔鏡を装着後経腔プローブを直視下に外子宮口に当てて、頸管長を測定した。（腔鏡負荷後頸管長／腔鏡負荷前頸管長）×100を頸管短縮度とし、75未満を腔鏡負荷試験陽性とした。また、頸管縫縮術直前と術後7日以内に頸管内癌胎児性フィブロネクチン（ffn）を測定した。〔成績〕11例中5例が早産、6例が正常産となった。術後腔鏡負荷前頸管長は早産群 $15.4 \pm 8.5\text{mm}$ 、正常産群 $19.0 \pm 8.9\text{mm}$ と差がなかったが、頸管短縮度は正常産群 90.5 ± 10.2 に対し、早産群で 61.2 ± 20.8 と有意に（ $p < 0.05$ ）低値であった。頸管短縮度と分娩週数の間には有意な正の相関（ $r=0.72$, $p < 0.05$ ）が認められた。早産に対する術前ffnのsensitivity, specificity, PPV, NPVはそれぞれ40%, 60%, 50%, 50%, 術後ffnはそれぞれ60%, 80%, 75%, 67%であったのに対し、腔鏡負荷試験ではそれぞれ75%, 83%, 75%, 83%と高かった。〔結論〕頸管無力症に対する緊急頸管縫縮術後の予後の予測においては、頸管長測定のみでは無力であり、腔鏡負荷頸管長測定が有用であることが示唆された。また、腔鏡負荷頸管長測定はffn測定よりも有用であることが示唆された。

**P-294 切迫早産におけるコンドロイチン硫酸
の頸管熟化抑制作用について**

秋田大学, *秋田赤十字病院

○小原幹隆, 平野秀人*, 小川正樹, 椿 洋光
細谷直子, 津田 晃, 田中俊誠

〔目的〕細胞外マトリックスを構成するグリコサミノグリカン(GAGs)のうち、低分子化したヒアルロン酸(HA)は炎症現象を介して頸管熟化を惹起することが知られている。しかし、HAと共に子宮頸部のGAGsの主要成分であるコンドロイチン硫酸(CS)の頸管熟化に対する役割はほとんど解明されていない。子宮頸管熟化機構にCSが関与するか否かを明らかにする、ことを本研究の目的とした。

〔方法〕妊婦50人(切迫早産6例、満期以前19例、満期9例、分娩第1期16例)および非妊婦7人より、本研究に供することの同意を得て頸管粘液を採取し、頸管粘液中CS濃度を高速液体クロマトグラフィーにて測定した。また、分娩第1期群の頸管粘液2検体を用い、外因性CSのHA低分子化酵素(HAase)活性に及ぼす影響について検討した。HAase活性の測定には蛍光標識HAを基質としたゲル濾過法を用いた。〔成績〕①切迫早産において頸管粘液中CS濃度は満期以前および満期群に比較し有意に（ $p < 0.05$ ）高値であった。一方、満期の分娩第1期では頸管粘液中CS濃度の有意の上昇は認められなかった。②妊娠時のCS異性体別の濃度ではコンドロイチン0硫酸(C0S)および4硫酸(C4S)が高く、6硫酸(C6S)は低かった。③外因性のCSは頸管粘液中HAase活性を濃度依存性に抑制した。抑制能はC6SおよびC4Sで高く、20mg/mlの添加でHAase活性はコントロールの80-100%抑制された。なお、C0SのHAase活性抑制能は他のCSに比し低かった。〔結論〕CS、主にC4Sは切迫早産においてHAaseによるHAの低分子化を抑制することにより、頸管熟化を抑制していることがはじめて示唆された。